

簡便な性格測定尺度の作成について

－性格の5因子モデルをもとに－

A study on construction of a simplified personality scale on the basis of the five-factors model

水野邦夫
Midzuno Kunio

要 約

本研究では、人の基本的な性格傾向を簡便に測定する尺度を作成することを目的とした。性格の5因子モデルに従い、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、洗練性などに関する項目を収集し、24項目からなる尺度を構成したが、収集したデータをもとに信頼性および妥当性の検討を行ったところ、尺度は仮説どおり5因子を形成したものの、各特性を測定する尺度の内的整合性や因子的妥当性には問題があった（とりわけ、協調性尺度においてはその傾向が強かった）。そこで、項目をさらに厳選し、各特性を代表する項目をそれぞれ3項目（計15項目）に絞り、これらを各特性尺度の「コア項目」として、再度因子分析を行ったところ、より明確な5因子構造が示された。また、コア項目で構成される尺度は、他の5因子尺度との基準関連妥当性も高かった。それでもなお、内的整合性には問題が残り、項目をさらに選び直す必要性が論じられた。

Key Words：簡便な性格測定尺度、性格の5因子モデル、内的整合性、因子的妥当性

心理学では人のさまざまな性格傾向を、しばしば心理検査（テスト）を通して測定する。測定の技法や測定する検査の種類は実に多様であるが、特定の性格に焦点を当てて測定しやすく、なおかつ測定が比較的簡単なのは、質

問紙法による検査であろう。質問紙法による検査は、一般に、いくつかの質問項目からなる調査票の形で構成され、各々の項目に真偽法や評定法で回答させるもので、各項目への回答を得点化し（たとえば、「はい」と回答すれば1点、「いいえ」と回答すれば0点）、必要に応じて項目群の合計点を算出し、測定すべき性格特性の程度を数量的に表現することができる。また、実施方法が簡便なため、初心者でも熟練を要することなく実施することができる。さらに、いわゆる「心理測定尺度」のレベルであるならば、他の技法（例えば投影法など）による心理検査に比べると容易に作成することが可能である。それらの理由からか、性格傾向の測定には、質問紙法が多用されているようである。

ところで、質問紙法によってさまざまな性格傾向を測定するとなると、その項目数はかなり多くなる。表1に、わが国で用いられている主な質問紙法的性格検査の項目数を示すが、1つの性格特性を測定するのに少なくとも10

表1 わが国で用いられている主な質問紙法形式の性格検査の項目数について

検査名	測定する性格特性の数	項目数
ミネソタ多面的人格目録 (MMPI) (Graham, 1977; 田中訳, 1985)	10 ^{a)}	550
日本版 NEO-PI-R (下仲・中里・権藤・高山, 1999)	5(30) ^{b)}	240
EPPS 性格検査 (肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原, 1970)	15	225
5因子性格検査 (FFPQ) (辻, 1998)	5(25) ^{c)}	150
矢田部-ギルフォード性格検査 (辻岡, 1982)	12	120
新性格検査 (柳井・柏木・国生, 1987)	12	120
モーズレイ性格検査 (MPI) (Eysenck, 1959; MPI 研究会訳, 1964)	2 ^{d)}	80
主要5因子性格検査 (村上・村上, 2001)	5 ^{e)}	70
日本版 NEO-FFI (下仲ら, 1999)	5	60

註

a) この他に、妥当性などを検討する4つの尺度が含まれている。

b) 測定するのは5つの性格特性であるが、各特性に6つの下位次元を設けている。

c) 測定するのは5つの性格特性であるが、各特性に5つの下位次元を設けている。

d) この他に、虚偽発見 (L) 尺度や緩衝項目が含まれている。

e) この他に、建前尺度 (計10項目) が含まれている。

項目以上は充てられており、多面的な性格傾向を測定するとなれば、場合によっては数百の項目に回答しなければならない。これは、時間的な制約などがある場合には実施しにくいであろう。また多くの項目に回答することで、回答者に負担がかかることも考えられる。もちろんこれらは、測定の精度を高めたり、多くの特性を測定するためにはやむを得ないことであるが、少数の項目からある程度の種類の性格傾向を測定できる尺度があれば便利なこともあろう。

また、多用される検査・尺度のなかには、作成されてから数十年前も経過しているものもあるため、現在では（とくに若年層において）あまり用いられない単語や状況設定が項目に出てくるものがあるようである。それから、海外の検査・尺度を翻訳したものの場合、文章表現が回りくどかったり、難解だったりすることがあるようである。あるいは、近年言われている若年層の「国語力の低下」により、実施者からすればそれほど難しくないとと思われる表現を回答者が理解できなかつたりする恐れも考えられる。筆者の個人的な経験ではあるが、以前若年者を対象に、矢田部-ギルフォード性格検査を実施した際、「早合点」、「はにかみや」、「引っ込み思案」、「まごつく」などの意味を知らなかった者が、少数ではあるがいたことがあった。また、大野（1984）の充実感尺度を実施した際に、「主体性」、「使命感」などの漢語を理解しない者がいたこともあった。さらに、下仲ら（1999）のNEO-PI-Rを実施した際には、質問内容が難解であるという指摘を受けたことがあった。もちろんこれらの経験は、多用される検査・尺度の信頼性・妥当性の低さを示すものではないが、文章表現は、回答者にとってなじみやすく、平易なものであるにこしたことはないであろう。

そこで本研究では、1)少数の質問項目でさまざまな性格傾向が簡便に測定できること、2)文章表現がなじみやすく平易であること、の2点を基準に性格測定尺度を作成することを目的とした。

なお、尺度の作成に際し、どのような性格理論に立って作成するかは重要なことである。本研究では、性格心理学の分野ではひろく受け入れられてい

る「性格の5因子モデル(five-factors model)」に基づいて作成することとした。

方 法

新尺度の構成 まずはじめに、性格の5因子モデルをもとに、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性（本研究では、以後「洗練性」と称する）の各特性を表すのにふさわしい項目を作成した（作成にあたっては、村上・村上（1997）の主要5因子性格尺度などを参考にしたが、最終的には筆者の考えにより作成した）。次に、質問紙法的心理検査・尺度にバイアスをもたらすとされる、社会的望ましさを測定する項目として、Crowne & Marlowe（1960）の社会的望ましさ尺度（日本語版は安藤（1987）による）を参考に、社会的望ましさに関する項目を作成した。なお、性格特性、社会的望ましさに関する項目の双方とも、文章はなるべく平易になるように注意した。

そして最終的には、各特性および社会的望ましさそれぞれについて4項目、計24項目からなる尺度を構成した（以後「新尺度」と呼ぶ。項目については表2を参照）。

被調査者 2004年から2005年にかけて、滋賀県内の2つの大学で心理学関連の授業を受講した大学生に調査への協力を依頼したところ、342名がこれに応じた（ただし、下記質問紙についていずれか一方にしか回答していない者も含まれている）。

質問紙 調査に際し、新尺度と村上・村上（1997）の主要5因子性格検査（ただし、同検査の「建前項目」は省略）を用意した。なお、いずれも、「非常にあてはまる（5点）」から「全くあてはまらない（1点）」までの5段階評定で回答できるようにした。

手続き 授業時間の一部を利用し、上記質問紙を実施した。なお、両者は同時に実施せず、時間をおいて実施した。

表2 新尺度の質問項目

-
- 1 初対面の人にも気さくに話しかけることができる。
 - 2 頼まれた仕事は快く引き受けるタイプだ。
 - 3 飽きっぽい性格だ。*
 - 4 けっこう心配性である。*
 - 5 自分って鈍くさいなあと感じることが多い。*
 - 6 他人に嫉妬したことなどない
 - 7 1人でいる方が気楽でいい。*
 - 8 人からよく「マイペースなやつだ」と言われる。*
 - 9 やると決めたらとことんまでやる。
 - 10 いやなことがあってもすぐに気分転換ができる。
 - 11 自分の考えはセンスがよいとよくほめられる。
 - 12 人のうわさ話が好きだ。*
 - 13 「元気」が私のとりえである。
 - 14 お年寄りの相手をするのが好きだ。
 - 15 仕事はおおざっぱにやってしまう方だ。*
 - 16 気分がころころ変わりやすい。*
 - 17 私は人にだまされやすいと思う。*
 - 18 私はいつでも他人に甘く、自分に厳しい。
 - 19 ふだんはおとなしいほうだ。*
 - 20 自分は「ひねくれ者」だと思う。*
 - 21 だらだらするのは好きではない。
 - 22 あんまりくよくよしないタイプだ。
 - 23 仕事の要領を覚えるのは早いほうだ。
 - 24 気になる人の手帳を拾ったら、つい中を見てしまう（だろう）。*
-

註

1) 各項目は、下記のように特性を表すものと仮定している。

外向性：項目番号1,7,13,19

協調性：項目番号2,8,14,20

勤勉性：項目番号3,9,15,21

情緒安定性：項目番号4,10,16,22

洗練性：項目番号5,11,17,23

社会的望ましさ：項目番号6,12,18,24

2) *は逆転項目を表す。

結 果

回答の不備など、回答の信頼性が低いと思われるデータは分析の都度に除外した。

新尺度の因子分析 新尺度について、社会的望ましさに関する項目を除いた20項目について因子分析を行った（主成分解，Promax回転，5因子指定。また分析に際して、逆転項目は値を逆転した）。因子パターンおよび因子間相関を表3に示す。

第1因子は、項目10, 22, 4が高く負荷しており、「情緒安定性因子」と考えられる。第2因子は問1, 19, 13, 7が高く負荷しており、「外向性因子」と考えられる。第3因子は問17, 5, 23, 11が高く負荷しており、「洗練性因子」と考えられる。第4因子は問9, 15, 3が高く負荷しており、「勤勉性因子」と考えられる。第5因子は問20, 8が高く負荷しており、「協調性因子」と考えられる。

このように、新尺度を構成する項目は、尺度作成時の仮定を支持すべく、同じ性格特性を測定する項目どうしが同一因子内で高く負荷する傾向がみられた。しかし、いくつかの項目は、作成時の仮説に反して、想定したものと別因子に高く負荷したりしている。まず問16は、情緒安定性に関する項目として作成されたが、第1因子の負荷量は非常に小さく、むしろ第4因子との関連が強いことが窺える。また問2, 14は元来は協調性に関する項目であったが、問2は第4因子に高く負荷しており、問14は第5因子での負荷量が最も高いものの、値がマイナスになっている。そのほか、問7は第2因子だけでなく、第5因子にも高く負荷しており、問21はいずれの因子にもそれほど高く負荷していない。これらのことから、新尺度には仮説にそぐわない項目が含まれていることが示唆された。

新尺度の内的整合性 次に新尺度の各性格特性尺度に関する尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、外向性尺度は.643、協調性尺度は.202、勤勉性尺度は.538、情緒安定性尺度は.574、洗練性尺度は.603であった。このように、各尺度の内的整合性は低く、信頼性に

表3 新尺度の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	I	II	III	IV	V	h^2
10	.779	.131	-.101	.033	.051	.662
22	.775	.083	.244	-.030	.080	.712
4	.644	-.018	.163	-.033	-.056	.448
1	.080	.709	.198	-.088	.004	.517
19	-.035	.670	.138	-.061	-.126	.436
13	.299	.581	-.096	.178	.113	.569
7	.073	.498	-.107	-.095	.496	.518
17	.116	-.042	.766	-.120	-.107	.578
5	.112	.049	.744	.005	.090	.608
23	.207	.250	.529	.199	-.055	.465
11	-.121	.322	.436	.023	-.001	.261
9	.116	-.075	.037	.743	-.295	.588
2	-.012	.175	-.372	.653	.052	.537
15	-.359	.010	.323	.511	.043	.540
3	.072	-.349	.143	.453	.311	.521
16	.069	-.230	.186	.401	.319	.447
21	-.121	.261	.155	.333	.209	.314
20	.209	-.094	-.099	-.012	.768	.607
8	-.429	.160	.104	-.016	.656	.650
14	-.023	.365	-.045	.344	-.380	.365
寄与 (説明率(%))	2.249 (11.24)	2.177 (10.89)	2.133 (10.66)	1.969 (9.84)	1.814 (9.07)	10.342 (51.71)
因子間相関						
	I	II	III	IV		
II		.138				
III		.061	-.130			
IV		.071	.097	.214		
V		.008	.037	.199	.184	

註
ゴシック太字は、因子負荷量が.40以上であることを表す。

においては相当に問題が残るといえよう。

各特性尺度項目の再選定 上の結果からわかるように、新尺度は因子的妥当性においても、内的整合性においても、適切な尺度であるとは言い難い。そこで、各特性尺度についてできるだけ因子的妥当性や内的整合性を高めるために、項目の再選定を行った。

表4 コア項目の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	I	II	III	IV	V	h^2
10	.802	.083	-.059	.083	-.022	.680
22	.774	.032	.291	.052	-.041	.721
4	.630	-.012	.160	-.085	.022	.437
19	-.112	.779	.009	-.201	.040	.602
1	.029	.712	.175	-.003	-.170	.563
13	.252	.637	-.126	.156	.101	.588
17	.086	-.096	.775	-.129	-.052	.591
5	.097	-.037	.767	.106	.041	.655
23	.156	.252	.585	-.021	.118	.513
20	.213	-.136	-.076	.816	.051	.699
8	-.431	.096	.159	.681	-.070	.690
7	.064	.485	-.172	.481	-.015	.521
9	.120	.053	-.098	-.239	.830	.725
3	.034	-.207	.078	.265	.627	.551
15	-.390	.096	.223	.104	.581	.586
寄与 (説明率(%))	2.196 (14.64)	1.951 (13.01)	1.855 (12.37)	1.613 (10.75)	1.507 (10.05)	9.123 (60.82)

因子間相関		I	II	III	IV
II		.196			
III		.058	.034		
IV		.012	.083	.138	
V		.068	.024	.244	.073

註

ゴシック太字は、因子負荷量が.40以上であることを表す。

各尺度について、各項目を除いた項目の合計と当該項目との相関係数および当該項目を除いた a 係数を算出したところ、外向性尺度では問7が、勤勉性尺度では問21が、情緒安定性尺度では問16が、洗練性尺度では問11が、それぞれともに相関係数が最も低く、 a 係数が最も高かった。そこで、これらの項目を除外したもの（それぞれ3項目ずつ）を各尺度のコア項目とした。コア項目の a 係数は、外向性尺度.613、勤勉性尺度.514、情緒安定性尺度.710、洗練性尺度.622であった。また、協調性尺度については、 a 係数がきわめて低かったため、問8、20に因子分析で比較的負荷量の高かった問7を加えた

表5 主要5因子性格検査と新尺度の特性どうしの相関

		主要5因子性格検査				
		外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
新尺度 (コア項目のみ)	外向性	.804 *** 228	.199 *** 230	-.078 229	.132 * 224	.187 ** 228
	協調性	.256 *** 228	.442 *** 230	.169 * 229	-.073 224	.035 228
	勤勉性	.033 228	.184 ** 230	.642 *** 229	.104 224	.403 *** 228
	情緒安定性	.247 *** 227	.087 229	.107 228	.716 *** 223	.266 *** 227
	洗練性	.178 ** 228	.081 230	.503 *** 229	.309 *** 224	.598 *** 228

註

1) * p < .05, ** p < .01, *** p < .001

2) 各値の上段は相関係数, 下段は度数をそれぞれ表す。

3項目について α 係数を算出したところ, .296となったので, この3項目を協調性尺度のコア項目とした。

コア項目の因子分析 各尺度のコア項目について, 再度先と同様の因子分析を行った。因子パターンおよび因子間相関を表4に示す。表から, 問7を除き, いずれの項目も1つの因子にのみ高く負荷しているのが分かる。

尺度の妥当性 次にコア項目から構成される各特性尺度の妥当性を検討するために, 各特性尺度と村上・村上(1997)の主要5因子性格検査でそれぞれに相当する特性尺度との相関係数を算出した(ちなみに, この検査について同様の因子分析を行ったところ, 各項目はほぼ仮定される因子に高く負荷し, また各尺度の α 係数値も.813から.924と非常に高かった)。それぞれの相関係数を表5に示す。いずれも対応する尺度どうしの相関は高く, 新尺度の基準関連妥当性の高いことが示されたといえよう。

考 察

本研究では、項目数が少なく表現が平易な、簡便な性格測定尺度を作成することを目的とした。性格の5因子モデルに基づいて質問項目を検討し、信頼性・妥当性の検討を行ったが、最終的には各特性から3項目、計15項目からなる尺度を構成することができた。しかしながら、特に信頼性（内的整合性）においては必ずしも満足できるものではなく、とりわけ協調性尺度は信頼性が低く、また主要5因子性格検査の協調性尺度との相関も、満足しうるほどには高くはなかった。より精度の高い尺度を構成するためには、項目の再検討が必要であろう。

また、今回は社会的望ましさに関する尺度については、とくに妥当性を確認する指標がないため、検討していないが、内的整合性は低かった（ $\alpha = .324$ ）。この尺度を設ける必要があるかどうか、今後は検討すべきであろう。

引用文献

- 安藤清志 1987 さまざまな測定尺度 2. 承認欲求 末永俊郎（編） 社会心理学研究入門 東京大学出版会 Pp. 215-218.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 349-354.
- Eysenck, H. J. 1959 *Maudsley Personality Inventory*. London: University of London Press.
- （アイゼンク H. J. MPI研究会（訳編）1964 モーズレイ性格検査手引 誠信書房）
- Graham, J. R. 1977 *The MMPI-A practical guide*. Oxford University Press.
- （グレイアム J. R. 田中富士夫（訳）1985 MMPI臨床解釈の実際 三京房）
- 肥田野直, 岩原信九郎, 岩脇三良, 杉村健, 福原真知子 1970 EPPS性格検査手引（大学・一般用） 日本文化科学社

村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.

村上宣寛・村上千恵子 2001 主要5因子性格検査ハンドブック 学芸図書

大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, **32**, 100-109.

下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 1999 日本版NEO-PI-R, -NEOFFI使用マニュアル 東京心理

辻 平治郎 (編) 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房

辻岡美延 1982 新性格検査法 日本心理テスト研究所

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 1987 プロマックス回転法による新性格検査の作成について (1) 心理学研究, **58**, 158-165.

付 録

新尺度 (コア項目のみ) の記述統計量に関するデータ

		度 数	平 均	標準偏差
外向性	全体	256	8.176	2.799
	男子	160	7.694	2.680
	女子	95	9.021	2.806
協調性	全体	256	7.582	2.391
	男子	160	7.781	2.410
	女子	95	7.284	2.323
勤勉性	全体	256	8.922	2.474
	男子	160	8.863	2.499
	女子	95	9.042	2.445
情緒安定性	全体	255	7.514	2.694
	男子	159	7.459	2.572
	女子	95	7.611	2.911
洗練性	全体	256	7.977	2.679
	男子	160	8.063	2.719
	女子	95	7.800	2.612
社会的望ましさ	全体	256	7.660	2.451
	男子	160	7.425	2.448
	女子	95	8.063	2.427